

## 第9回高等学校改革プラン推進委員会（第二推進委員会）議事録

1 日時 平成17年10月9日（日）午後2時00分～午後5時00分

2 場所 長野県上田合同庁舎 6階 講堂

3 出席委員

飯島 俊勝委員長	荻原 拓次委員
佐藤 元太郎副委員長	宮阪 義彦委員
芹澤 勤委員	滝澤 清登委員
遠山 順孝委員	中沢 裕委員
小林 将喜委員	西村 廣一委員
太田 節委員	市川 久由委員
和泉 碩也委員	原 貞次郎委員

4 開会

（植松主任教育支援主事）

本日はお忙しい中、また連休中にもかかわらずお集まりいただき、ありがとうございます。  
それでは、委員長よりよろしくお願いいたします。

（飯島委員長）

ご苦労さまでございます。

第9回目の高等学校改革プラン推進委員会を開催させていただきます。

よろしくお願いいたします。

それでは始めにいつものように資料が出ております。

詳細について事務局のほうから説明をお願いいたします。

5 資料説明

高校教育課植松主任教育支援主事から説明 【説明内容省略】

（飯島委員長）

はい、ありがとうございました。

なお、芹澤委員と西村委員は所用のため若干遅れてくるということでご了解を賜りたいと思います。

それでは資料の説明についての質問をお受けしたいと思います。

丸子実業の就職状況につきましては太田委員がご希望していた資料だと思いますがよろしいですか。

（太田委員）

丸子実業高校については、準備いただいた資料によりある程度が理解できましたが、一つ疑問に思っているのは、就職者の37%の皆さんは、入学時は進学希望をしていたのにもかかわらず、学力がともなわず、就職せざるを得なかったのか、それともはじめから、就

職のために実業学科を専門的に勉強をするつもりであったのか、どちらなのかということです。このところが、判断のポイントになりますので、次回までに調査をお願いしたいと思います。

それと、教職員の減少人数のデータがだされていますが、減少者は他部門に再配置されるのか、それともいわゆる早期退職優遇策による措置を取られるのか、どちらでしょうか。再配置するのであれば、どこかの部門がコストアップになります。県財政の全体的な位置づけでどうなるのか、教えていただけますか。

（飯島委員長）

2点事務局のほうでお願いします。

（吉江高校教育課長）

太田委員さんお尋ねの2点につきましてお答えいたしますが、まず1点目の丸子実業高校の生徒さんの状況です。

これにつきましては実はちょっと今ご紹介いただきました関係について充分お答えできる資料を持ち合わせておりませんので、これは後日お答えしたいと思っております。

ただ、ご覧いただきますように兩年比べましても、就職の比率がわりあいと動いておりません。ですから、おおむねのひとつの要望としましてこういう傾向がある可能性が高いのではないかとと思っておりますが、あらためましてお答えしたいと思っております。

それと再編整備候補案絡みで、いわゆる教職員の減をどうとらえるのかということでございますが、これは単に教育委員会の関係に限らず私ども県の場合に、知事部局と申しますか、行政の職員もそうなんですが組織改編等に伴いまして減少がある場合には基本的には退職者とそれから採用との調整をおこなっております。

それで、最終的な「絵」が見えた段階で、調整をおこないつつ、当然ながら今お話がございました再配置のようなかたちをとりながら最終的なかたちにもっていこう、というようなことを考えた次第でございますのでその旨ご理解いただければと思います。

（太田委員）

はい、わかりました。

（飯島委員長）

他に資料についての質問はございますか。

（原 委員）

お願いします。

1点は岐阜県のフロンティア高校、まずはこの学校はどこに立地をしているのか、ということです。

それから2点目はこの資料の1番最後に在籍生徒の数が載っていますが、この見方がよくわかりませんので教えてもらいたいのですが。例えば1年次は1A B Cというようになっていますね。先ほど説明では、1部が80名募集、2クラス相当と理解できます。2部が

80 名、3 部が 40 名というお話でしたが、それがどうかたちでこの記号でいうホームルームの枠はどう対応しているかということでもあります。

さらに、この 1 年 2 年 3 年といきますと、たとえば 2 年次は A B D E G、3 年は A B D C というように編成がだいぶ変わってきておりますね。

これはなぜかということ、そして、最後に 4 年次は A A C D、在籍者が 40 名という極端に減りますね。これはなぜなのでしょう。華陽フロンティアについては以上であります。

それから資料 3 の数字の資料であります、3 つ目の丸印 1 番下が学校運営費の削減について触れられています。およそ 23 億円となっておりますが、教員の人件費等は国から出るのではなかったでしょうか。

つまり県の中からこれだけの学校が統廃合されて教員も減るのも当たり前ですが、しかし人件費は国庫負担があると私は理解をしていたのですが、それについてお願いします。

もう 1 点、学校運営費の削減がすでに載っていますが、たとえばこれは計画通りいった場合という前提なんです、総合学科をつくとか、多部制・単位制にするとかささまざまな面で施設設備を更新したい新設したりということが考えられるわけですが、それらの試算はどうなっているのですか。

加えれば、どこかの学校が統廃合される、そうするとなくなった学校の跡地はどうなるのか。売却となれば収入となるでしょうし、そうしたつまり全体に関わる再編整備による数字上の問題が触れられていないと感じます。この辺について質問したいと思います。

（飯島委員長）

4 点あります。

事務局お願いします。

（植松主任教育支援主事）

華陽フロンティア高校につきましてお答えをさせていただきます。

この学校は、岐阜市内でございまして、岐阜市の少し外れというところでございまして、駅でまいりますと西岐阜という駅がございまして、そこから 2.5 扣くらい離れたところ、南といいますかそちらのほうにあるところということでございます。

それから、在籍生徒数のことでございますが、1 年生 1 部 80、2 部 80 ということで 2 クラスということではではないというようなことでございますので、それぞれの 80 名をその選択科目等によりまして、3 修 4 修も合わせて少しうすがいというようなかたちでクラスの編成をおこなっていると考えております。

それから 4 年次につきましては 3 修で 3 年次で卒業する生徒が大勢いるために 4 年次はだいぶ生徒数は減少するという状況であるということでございます。

華陽フロンティア高校については、以上でございます。

（原 委員）

すみません、ちょっといいですか。

確かめたいのですが、今のところたとえば 1 年生でいくとその A から H までありますが、午前部と午後部が、どこで別れるのでしょうか、ということと、それから岐阜県はこの多

部制は何校立地していますか。

（植松主任教育支援主事）

最初のことでございますが、今ここでどこまでが1部2部だということ、ちょっと正確にわかりませんのでまた調べまして、次回にご報告させていただきたいと思います。

それから岐阜県でございますが、この華陽フロンティア高校の他に東濃フロンティア高校という学校が平成16年土岐市でございますが、やはり再編によりまして学校名も変わりまして3部制の単位制の高校ということでございます。

（飯島委員長）

そうすると2校ということですか。

（植松主任教育支援主事）

はい。そういうことになります。

（飯島委員長）

それでは次の3点、4点目の質問についてお願いします。

（吉江高校教育課長）

お答えいたします。

ひとつといたしまして、学校運営費の関係でございますが、以前の推進委員会におきましてもお答えした経過がございますが、義務教育の場合小中学校の教員の場合には明確に国庫負担金というようなものが義務的に2分の1、財源として入ってきます。

県の予算で考えますとそういうような国庫からくる負担金とか補助金というようなものを特定財源と申しておりますが、いわゆる特定財源が基本的には2分の1きておりまして、それに残る2分の1が一般財源で組み込まれるというようなかたちになっております。

それで、それに対しまして、高校の場合の教員につきましてこれはもちろん財源とすれば授業料収入というのがございまして、これがある意味これが特定財源ということにあたるかと思っておりますが、国から負担金とかあるいは補助金とかそういうようなもので財源化されるものは基本的には一切ございません。

ですからある意味、ひとつの目安としまして交付税というようなもので、いわゆる本来は地方が収入にすべき税収入を国がある一定の基準に基づきまして、代わりに徴収したのを再配当するというようなことでいただいている交付税のひとつの基準というものにもなっておりますが、今申し上げました交付税とそれから県の税収というのは県の財源からいいますと、一般財源となっております。

その一般財源というところからすべてが教員の給与につきましては支出されているということでご理解をいただきたいと思います。

1部分先ほど申し上げましたように約60億円の授業料収入というようなものが全体の運営費なりあるいは人件費に充てられておりますが、それ以外はすべて一般財源ということでご理解をいただきたいと思っております。

それから次のいわゆる運営費の増分にかかわる経費がどのくらいかというようなことにつきまして、これは先ほど議会で答弁の絡みの中でご説明をいたしました但一般質問の 8 ページの中ほどの松沢教育長職務代理者の答弁を後ほどご覧いただきたいと思っておりますが、私どもとしますと 23 億というのは基本的に通年ベースでかかる経費が削減できるだろうというスタンスをもってあります。

ですから、今原委員さんからお話がございましたようにスタート時における何らかの経費というのは、一過的な経費としてかかるものがありえるだろうと思っておりますが、それにつきましてはそれぞれの学校をどういうパターンの学校にしていけるのか、たとえば総合学科高校の場合には塩尻志学館高校の場合でいきますと、8 系列の系列があるわけですがこの 8 系列のものが系列が少なくて済むのか、はたまたはこの学校を転換するのかによりまして初期投資の金額も変わってまいります。

またさらには 8 系列がたとえば 6 さらには 4 系列というような系列数によりまして、毎年の運営費も変わってまいりますし、一般的に専門高校のほうが基本的には運営費が高くなっております。

その高くついている専門高校を仮に転換した場合は、経費的に極端なことも申し上げますとあまり変わらないのものもあろうかと思ひますし、さらにはそうでない場合もあろうかと思ひています。

そんなことから設置する学校や設置する内容によって変わってまいりますので、そこまでは見込んでいないというようなお答えをされているしだいでございます。

また、仮に統合となりまして統合された学校を、今後どうするかというようなことにつきまして先ほども例示をお出しになられておりましたが、具体的に私どものほうは今後いろいろなケースが考えられますし、また地元とのお話もあろうかと思ひますので現時点においてどこをどうするというようなことにまで検討を重ねているという訳ではないということでご理解いただきたいと思ひます。

( 荻原委員 )

まず 1 点は、フロンティア高校は新設でしょうか。また長野県では多部制・単位制と申しておりますが、ここでは定時制課程、通信制課程と併置というかたちで出ておりますがこの方がはつきりするような気もします。

それと先日の静岡中央高校の例がございましたが、それとものすごく時間帯も違っているし、中身もだいぶ違うような気がするのですが具体的に資料と聞かれたらたぶん 2 つ出るのですかね。

具体的な学校では教育委員会としてはどちらがイメージにに近いのでしょうか。

( 植松主任教育支援主事 )

それでは、お答えいたしたいと思ひます。

華陽フロンティア高校は平成 12 年までは岐阜県立華陽高等学校ということで、昭和 23 年から定時制通信制を置く学校ということとずっとまいりまして多部制の 3 部制の体制になりましたのは平成 12 年からで、そのときに校名を変更したということとでございます。前身は戦前からある学校ということで新たにできた学校ではないということとでございます。

それから、授業時間帯等につきましてはそれぞれの学校で特徴を出しておりますので、

先ほど資料などございましたが1部もやはり朝9時というような時間ではなくて少し遅めに始まるような時間帯を設定してございますが、その辺はそれぞれの学校が独自性を出して特色を出してやっていくということだろうと思います。

(荻原委員)

どちらの、県の教育委員会としてはどちらのイメージをもって我々に提示したいのか、「したい」といういいかたはないと思いますけどもイメージとして、先日の高校とこの高校とだいぶ違うものでちょっと戸惑っていますが、私どもが私が抱くイメージとしては、こちらのほうが定時制、通信制としっかりうたっているからいいのかなという気もしますしかし、県のイメージとすればどちらになるのでしょうかね。

(飯島委員長)

資料としては3校目でしょうか。

(柳澤教育主幹)

前に長野県の単位制のイメージということで、もうひとつまた資料が出ていたかと思いますが、基本的には静岡中央の場合もそうですが、システムとしては華陽フロンティアも同じでございまして、定時制ということで午前、午後、夜間あるいは県によっては場合によると夜間がなくて、午前、午後の2部制で多部制・単位制というかたちでやっている県もございまして、ここに挙げさせていただいたのは、3部制でということの例で挙げさせていただきました。

基本的には3部制をとることを考えております。そしてまた通信制は今現在長野県に2校ございますが、長野西にある、通信制を候補案としてお示ししましたのは、北信の多部制・単位制の独立校のところに併設をするということと、それとたとえば東信地区の多部制・単位制につきましては、この前も数をお示ししておりますけど、この小諸、佐久この東信地区からもたくさんの通信制に在籍をしている生徒さんもいらっしゃいますので、そういったかたがたへのスクーリングの利便性といいますが、そういったことも通信制の拠点となる、北信の高校との連携を図りながら、そういうこともイメージできるのではないかと考えておりますので、このシステムを使ってどういう多部制・単位制をつくっていくかという中身につきましてはいろんなことが考えられるだろうと、そのように思っております。

(飯島委員長)

ありがとうございました。

資料としての説明ですから荻原委員よろしいでしょうか。

他に、資料の説明についての質問はございますか。

(中沢委員)

先ほどの原委員さんの質問と関連しますが、岐阜の華陽フロンティア高校の資料の1番最後のページこの在籍生徒数ですが、ちょっとまだ見方がよくわからない部分もありますが、まず在籍生徒数というのは年度でいうと17年度なのでしょうか。

(植松主任教育支援主事)

ええ、そうでございます。本年度の学校要覧の数字です。

(中沢委員)

そうしますと、たとえば1年次というのは今年度入学した数と見ていいのですかね。

(植松主任教育支援主事)

休学者も一部入っているかと思いますが、基本的には今年度入学をした生徒でということでございます。

(中沢委員)

その休学者はどのくらいいるかもわかりませんが、下の数字と合いませんね。

左側の199と右側の2と2の4合わせても203人でしかない。その辺がちょっとよくわかりません。

それから、本年度入学者が上の数字でいうと222、1年経って2年目入った生徒が165、3年目経った生徒が137、4年目たった生徒が40 こういうように、と理解するのですが3年で卒業していくから4年次は当然減ってもいいのですが、この222から165、137と減っているのですね。

それで、それを見るとその昼3、昼4のところが減ってきていますね。

夜の4というのは18、17、18とそう変わらないですが、そうなった時になぜこの昼3、昼4はこんなに減ってきているのか。その辺がちょっと疑問に思ったのです。

もし、わかったら教えてください。

わからないならまた後日でということで結構です。

(植松主任教育支援主事)

200人募集になりましたのは16年度からでございますその1年前は、募集が40名少なかったということでございますので、生徒が減ったということではなくて3年次はもともと入って時から少なかったということだと思います。

(飯島委員長)

2年次、3年次ではどうでしょう。

(植松主任教育支援主事)

4年次は三修で卒業した生徒が大勢いるので、4年次は少ないということでございます。

(飯島委員長)

中沢委員よろしいですか。

では、他に資料に対しての質問ございますか。

それでは、これから本来の私たちの委員会に任された議論に入っていきたいと思います。

前回第8回委員会では塩尻志学館高校の田畑先生においでいただいて、パワーポイントを使いながら具体的にいろいろ説明をいただきました。

総合学科また多部制・単位制を両方いっしょに考えるとまた議論があっちいたりこっちいたりしてしまいます。

前回の委員会最後にも芹澤委員からご指摘ありましたようにひとつ焦点を絞って議論したらどうか、というご意見がございました。

については総合学科について前回特にそのような説明を受けた経緯を踏まえてどうでしょうか、最終報告案では各地域に1校ずつということで、それについてのご意見いただきたいと思います。

たたき台としてこの地域は丸子実業がその総合学科の高校に移行すると出ていますが、それを含めてご意見ございましたらどうぞ。

(原 委員)

前回塩尻志学館からおみえになって説明いただきました。

その際私が質問申し上げた重要な点についてお答えがなかったのですね。

第1号の総合学科がスタートのときに教員定数についてかなりの手厚い措置がなされたと同っているのですが、その教員定数上の配慮、これについてはどうなのですか、お見えになった田畑先生はそれについて私からはいえないということでしたので、これはぜひ事務局から明確にお答えをいただきたいと思います。

(飯島委員長)

その点について事務局お願いします。

(吉江高校教育課長)

総合学科につきましては基本的にその規模によりますが、規模によって若干異なりますがたとえば、先生が19人と実習助手で何人ということで、たとえば13・4人の加配があるとかいうようなものがひとつの基準でございます。

それで、塩尻志学館高校につきましてこのたび議会での議論もございましたので、過去の例と調べましたところが、行政職との総数で申し上げますと、当時平成11年度まだ塩尻高校であったころです、11年度塩尻高校であったころが69名でありました。

その69名が平成12、13、14と完成型が3ヶ年度に渡っている訳なのですが、69名が最終的に平成16年度の段階で74名ということでプラス5名になっております。

さらに完成した年でいきますと73名ですから、プラス4名という状況でございます。

と申し上げますのは、先ほどちょっと触れたように塩尻志学館高校の場合には当初普通科とそれから農業科とそれから家政科がございました。この3つの科があった関係で先生の数がある程度以上の配置がされていた経過がございます。それで、そういうような学校



を総合学科高校にする場合には、必ずしも先生の数が単純に先ほど申し上げましたように、プラス 10 何人にはならないような状況でございます。

学校によりましてプラス 10 人ぐらいになるような場合もあるかと思っておりますが、前身の学校がどんな学科を持っているかということによりましてその数字が動いておりますので塩尻志学館で申しますとそのような状況であったということでご理解いただきたいと思います。

（原 委員）

今のお話のように塩尻高校時代職業科があって職業科の加配があったということも存じているのですが、今課長がいわれたその 69 なり 73 なり 74 という数字はちょっと私の聞き間違いでしょうか。

行政職も含めてとおっしゃいました。

（吉江高校教育課長）

ええ。

（原 委員）

これは、授業を持つ教員の数でお答えいただいたほうがわかりやすいと思うのですね。

（吉江高校教育課長）

教員の数で申し上げますと実は教員数は原委員さんご存知のように、生徒数の状況に応じて変わるものですから一概にいけないのですが、たとえば平成 10 年は 62 名いらっしゃいました。

その平成 10 年の 62 名が平成 15 年、14、15 は 64 名それで平成 16 年は、これどういう経過かそこまでは私も調べてきておりませんが平成 16 年はプラス 1 名で 65 名になっておりますが、基本的には 64 名程度ということで教員の数でいきますと 2 ないし 3 人残ると、というような状況でございます。

（原 委員）

そうすると、確認ですが教員の数でいくとこれは志学館の場合ですが前身が普通科もあり職業課程もあるそういうところを、総合学科に変換したときに教員数には 2 ないし 3 名とこういう理解でいい訳ですか。

（吉江高校教育課長）

常勤の教諭につきましては当然今お話申し上げたとおりでございます。

ただ、しかしながらですね、系列を設けることによりまして講座数は当然変わってまいります。

それで、講座数が変わってまいりますと、社会人講師をお願いしたりとかそういうようなかたちでの講師をお願いすることによって、講座数を確保するということになりますから、教員の数イコールがそういう意味で申し上げた場合には講座数ではないということ

ご理解いただきたいと思います。

（飯島委員長）

原委員よろしいでしょうか。

（原 委員）

はい。

（荻原委員）

魅力ある高校づくりという中で総合学科丸子実業ということで、出てきたと思うのですが、そういう中で私はちょっと通学時間を見てみますと、だいたい約 40 分が 6 割か 7 割、60 分以下でだいたい 9 割ぐらいの丸子実業高校の通学時間と、その中でそこにクラブ活動もありますので、それから自宅からの通勤通学を考えれば、7 時半ごろ家を出てクラブが今の時期は 6 時半ですか、終わって家へ帰ると 7 時半というのがまあ一般的な高校ではないかと思っておりますが、そういう中で考えますと実際には丸子実業高校へ通える旧 6 通学区のほうでは、しなの鉄道沿線に限られるのではないかと考えられます。

それから実際現在でも丸子実業高校へ行っている方は旧の 5 通学区で 90% ぐらいということとなっております。

反対に言えば旧 6 通学区では小諸近辺、しなの鉄道沿線だけはたぶん行けるだろうと、そういうことになれば残りの小海線沿線はどうしてくれるのかということになると、志学館についてもあそこは、塩尻は 1 番南のほうですから通学区で言えば大町などから考えますと旧 11 通学区がだいたい、9 割近く占めていますので、そういう便があるから小海線沿線はいいのか、ということはいいませんが、そのように考えられます。

もうひとつはここにある、今日たまたま就職が丸子実業高校 37% に出ておりますが、そういうことでいいますと、塩尻志学館は「中進学校」的な単位制で成功収めておるといのは、だいたいの見方ではないかと思えます。

だいたい 84% ぐらいが出口で見ますと進学して就職が 7% ぐらいということになっておりますのでそうなると丸子実業高校につきましても、現在普通科もございまして専門学科といいます応用生物とかそういったかたちのところが実際的には、普通科へ転換するのではないかとそのように見ますと、普通科が 5 クラスくらい増える勘定になるわけですね。

そうなると、それと比べてみますと野沢南のほうは、単位制・多部制になりますとそれがまたその分が普通高校は旧 6 通では減るというように私はどうしても考えます。

そうすると、「中進学校」としての野沢南高へ希望する子どもたちはどこへ行くかと、総合学科と関連していいますが、そういう意味では長聖という 150 人クラスの私立校の受け入れ先もあります。他の選択肢という部分はちょっと狭くなっていくというように考えますので、丸子実業高校が総合学科となった場合にはなんらかの手立てで通学を確保する。寮とかそういう部分ですね。

あるいは、もうひとつ考えられるのはしなの鉄道沿線の高校へ変えるかと、あるいは職業高校がございまして、そういったかたちのところを普通科と加えて総合学科に変えるのかという、その 3 つぐらいの選択肢があるのではないかと思います。

そういう意味では丸子実業高校がその上小地区の中核高校であることはわかるのですが、またそれがモデルとなるという部分は非常に志学館と似ていますので、わかるのですが、私としては旧6通の部分をどうするのか、どう扱っていくのかそこがしっかりしないと賛成できないということでございます。

（飯島委員長）

ありがとうございます。

旧6通の部分をどうするのかという話になってきておりますが、もうひとつ前向きに検討するということで、前回総合学科の良し悪しというかたちで考えますとこういう高校を取り入れる方向でお考えがいただけるのか、その辺のところでしょうか。

取り入れるということになると、今度は今、場所をどこにするか、という議論も出てくるかと思いますが、とりあえず総合学科、魅力ある学校づくりと合わせもってこの最終報告のように、この地域にひとつあるいは付帯決議で荻原委員がいましたように、もうひとつ通学の時間等考えるとどこかに設けなければいけないという付帯事項をつけるのか、その辺のところ合わせてご意見いただければと思います。

（西村委員）

今、委員長のほうからまさしくおっしゃったように、もう8回会議をやってきていますので、意見を述べる時には「総合学科について私は賛成です、または反対です。その理由は、こういう意見を持っています」という感じでやらないと、堂々巡りになってしまうのですよ。

まさしく今おっしゃったように話を展開していくべきだと思います。

その点からしますと私は総合学科については導入すべきと思っております。前回太田委員のほうから進学についての質問があり、今日は資料1で丸子実業進学等についての説明がありました。それで太田さんがどう思うのかかわかりませんが、今日の説明で、たぶん総合学科の導入についてはある程度この会としてオーソライズできると思っております。

（市川委員）

お願いします。

総合学科につきましては、ぜひ旧5通だけでなく旧6通もということで荻原委員さんの意見のようになっていければいいと思います。

まずは通学区の中には、東北南信の4学区のほう、4つの領域、地域の中に少なくともひとつといわず、少なからず、2つ3つと今後増えていくような可能性もあるのではないかとということをお含みかなと思います。

翻って考えますと以前の議論の中にもありましたように、普通科を総合学科にするのは少し難しいと思います。

職業科を総合学科にしていく、あるいは普通科と職業科の併設の高校につきまして総合学科にするのは比較的たやすいわけです。

というのは資料をご覧くださいいただいているように、塩尻高校の場合には資産があり

ます。農業科が設置されており実習用地など豊富に用意されていたわけです。

これを、普通科の領域を合わせる姿と合わせながらキャリア教育を中心として生徒の学ぶ意欲を引き出し、合わせて普通科では取れなかった資格も取れる。

あるいは職業科で学べなかった内容も普通科として学べる。それによって進学に対応でき、あるいは就職に対応できるように魅力ある高校になっていくから、前回前半は学校行事のために参加することができませんでしたが私の学んだ範囲での塩尻志学館の成功の例だと思います。

そのことに関しまして生徒たち大変敏感でしてしだいに勉強意欲を持ち、そして塩尻志学館高校に入学を希望するものが増えてきたかたちになっていくと理解しております。

この、資産のある学校たくさんの資産を現在持っている訳です。機械があり土地がありそして先生方のノウハウもある。

これが今小さな箱ごとにありまして 40 人でくくられまして 学科、 学科というようにして、40 人ずつ 1 つ 1 つの教室に全部細かくわかれている訳です。しかしそれは、満たされていないのですね。定員がたとえば 20 人、ある時にある年によっては 20 人そこそこであったり、あるいはある年によっては 40 人いっぱいであったりということで、非常に小さい箱に窮屈に入れられていたり、分けられ分別されているような状況です。

それはいっしょくたにして総合というどちらも単位制としてひとつひとつ生徒に個に合わせて多様な進路に合わせて見ていただけるということが、その総合学科の利点だというように思います。

ですから私も就職指導を高校でやっていた時にも専門性というのが、たとえば職業科を出てもやはり旅行会社にも行くしバスガイドにはなるし、普通科に行っても鉄工所には勤めるし、そういった多様な生徒の進路はできております。

そうした中でですね、先生方が多様に自分の専門性や施設を要して総合的に子ども 1 人 1 人見ながら単位を蓄積していくというこのシステムについて非常に魅力あるものを私は感じる訳です。

で、これを全部の学校ということはちょっと無理だと思います。資産については普通科にはほとんどないのですね。

これは見ていただければわかると思いますが、職業科の消耗品の額とか設備費とかですね、それは大変な額を毎年使っているようなことに私は思っております。

それに対して普通科はですね、紙と鉛筆だけで殆どやっておりますのでほとんどお金要らないという状況でいるのではないかなというくらいに思って、私正確なところわかりませんが私は印象ではそういうところでございます。

しかしそれを総合的に資産を状況に合わせて、先生方のキャリア教育とキャリアアップということで生徒に提供できるというこのシステムについては非常に期待するものですので、東南信にひとつずつということではなく、増やすということについても私は検討すべきだったのではないかなという感じがします。

以上です。

(飯島委員長)

ありがとうございます。

(中沢委員)

総合学科の設置について、どこに置くか、何校置くかということは別問題として、この第2通学区に置いていくという方向は賛成です。

それは、まず長野県下における実績、また他県における実績、学校運営の面から見てもこれはいいということが、データとして挙がっています。

それから、生徒のほうから見た場合にはいろいろ多様化する職業科に対応できている実績がありますね。そして生徒が満足感を持っている、さらにはそれぞれ生徒の進路がかなりの面で叶えられている。いわゆる、進路実績が上がってきている。とそういうような面から見て私はこの総合学科設置については賛成です。

(太田委員)

総合学科・単位制については、候補に上げられた丸子実業高校の入学時の就職、進学に関する意識調査お願いしているところですが、進学校である塩尻志学館高校をモデルにして、丸子実業高校を語ったら間違いだと思っています。

確かに、進学校となっている塩尻志学館高校では、いろいろの学科の授業を受けてみて、自分にあった進路を見出すことで、進学はどういう系統の学校がいいのか決められることができると思います。

しかし、丸子実業高校の37%の就職者にとっては、就職に有利か、不利かが大きな問題になると思います。この点は繰り返し申し上げているのですが、民間会社は、即戦力を求めていますので、学力面では専門性を大きな判断基準として採用の可否を決めています。

バブル期以後、企業は採用者数を極端に減らし、採用試験で厳しく選別しています。1名採用する場合でも、どこの部署で、何を担当してもらうか、そのためにどのような学科を履修している人がいいのか等々、採用者の条件が事前に決められ、関係部門とコンセンサスができています。

例えば、総合学科・単位制の丸子実業高校商業系と上田千曲高校の商業科各1名の応募者のうち1名を採用するような場合は、商業系と商業科では専門性に格差ができることは必然でありますので、普通に考えれば千曲高校商業科出身者が採用になっていくはずですが。

このように、実業高校として、就職希望者が不利になるような学校方式がいいのかどうか、論議が必要ではないでしょうか。

大学も、電気工学科というような狭いくくり方でなく、エレクトロニクス系統とか、産業工業系統とか、より幅広い履修の選択肢がもてるくくり方に転換した学校がありました。ブランド力のある大学ですが、ここの学生の採用面接をしたことがありましたが、「結局のところ貴方は4年間、何を勉強してきたのですか、これだけは、といえるものを説明してください」という素朴な質問に答えられなかったため、面接者全員一致で不採用にした記憶があります。

丸子実業高校には農業科、建築土木科もありますが、それぞれの先生方の率直なご意見も、一度お聞きしたいと思っています。

(佐藤副委員長)

私は総合学科に関しては疑問があり、反対意見を前に述べました。

それはどういうことかといいますと、先ほど太田委員のほうからも専門性というお話がありましたが、おそらくこの学科の制度を導入すれば基礎学力の低下は免れないのではないかと私は思います。

それで、だいぶ前のことですがどうしても引っかかるのです。ある新聞記事で中学3年の生徒にどういう学科のコースを特色コースとして望むかという中で、「基礎学力が学べる高校があってほしい」というのが44.7%あるのですね。

約2分の1の、44.7%ですから、2人に1人はもっと基礎教育、基礎学力を学べる高校がほしいと、このように答えている訳です。

そういう中で私は最初はこの高校、この制度をつくれれば長野県全体の学力は低下するのではないと思います。

何回か申しましたがやはり職業科も学び、普通科の科目もやりなんてそんな限られた時間の中でそういうことが可能ではないのではないかと、どこか必ず薄まってくるようなかたちになる、先ほどの太田委員の話ではないですが、専門性という意味も含めて基礎学力の低下これが非常に懸念されると思います。

ただ、いっぽう私が今諸手を挙げて反対ではないという話をする中である高校の先生とその話をした中でもっと基礎学力をしっかりと学ぶことに力を注いだらいいのではないか、という話をしたところ、「実は学校へ来て、ただ座っている子どもが非常に多く、基礎学力が中学時代、小学校中学時代からついていない、そういう子どもにもう1回基礎学力うんぬんといってもなかなか難しい、そういう中でやっぱりこういう職業分野とかこういう考え方もあるよという中で話をしていく場合にようやく勉強する気になる。そういう子どもに対してはある程度救いになるのではないかと」という話を聞きました。なるほどなあ、と思いました。

そういう中で私は先ほど丸子実業1校ではなくて、もっとつくるべきではないかという話には全面的に反対です。

丸子実業高校を対象にした総合学科の話が進んでいる中で1校とにかくそういう制度をやってみてこれがどのような結果を招くかということを充分検証した上で、廃止するなり増やしていくなりする必要があるところと思います。

以上です。

(飯島委員長)

現場の先生方が取り入れていこうという、動きの中で太田委員と佐藤委員はちょっと丸子実業ということに非常にこだわってしまっておりますけれども、要はこだわることではなくいわゆる前回の塩尻志学館高校の説明を受けた上でこの地域に取り入れるほうがどうだろう、という意見に対してはいかがでしょうか。

私のほうから質問して申し訳ないのですが。

(佐藤副委員長)

私は全体の中で高校改革という中で多部制・単位制ですか、これとそれから総合学科という話の中で、とりあえずは私も先ほどお話ししたように何も学校についていけない、授業についていけないような学生の救いにはなるだろう、というような中で、全面的に賛成ではありませんが1校はモデル的に開校してもいいかな、とこのように思っています。

(中沢委員)

今の佐藤委員さんの事なんですが、基礎学力というものの、イメージなんですけれど、「基礎学力」ということが今討論でないですけど、ちょっとイメージしているところが私と違うなということが思うので一言だけお願いしたいのですが、やはり基礎学力は、数学だろうと英語だろうと、あるいは理科だろうとあるいは商業関係の学習であろうと、その生徒がやはりやる気を持っていくその力だと思うのですよ。やはり関心意欲を持っていかないと何もならないのですね。

何か自分でこういうこと学んでみたい、こういうこと課題を解決してみたい、その関心、意欲これがやっぱり基礎学力の一番の元だと、で佐藤さんのおっしゃっている基礎学力は、もちろんそれもあるでしょうが、何かイメージとしてですね、「読み書き計算」これが中心になっているイメージがあるのですが、私はそれだけでなく、もっといろいろなものについて自から学んでいく、それが基礎学力の一番の元ではないかな、そういう点で考えたときに総合学科はそれに対応していくのではないかな、ということを感じます。

(飯島委員長)

ありがとうございます。

どうでしょうか。

基礎学力の討論になってしまいました。

(佐藤副委員長)

私もそれは読み書きそろばんだけではないということは承知しております。

しかし、実際問題として自分の進路を決定していく場合には必ずやはり一番基礎になる科目が読み書きそろばんではないかなと、そういう中で私は端的に申し上げれば読み書きそろばんということです。

(飯島委員長)

はい、ありがとうございます。

どちらが先にくるかという話になってしまいました、この辺でその件は終わりにします。

(原 委員)

私が発言しようとしたら学校関係者みんな賛成のようです。

その前に、違う観点から申し上げようと思っていた訳です。

今まで何度か質問をしたり、申し上げていたことがあるのですが、志学館が創設される塩尻高校から志学館に変わる、そのときに丸子さんも検討していた訳ですね。

交通の利便性の高い塩尻が開校ということになる、そして丸子さんが総合学科を内部で検討されて手を挙げられた、にも関わらずそれがだめな結果になった訳ですね。

大きな理由は通学上の利便性の問題、駅から遠いということ、それから先ほど土木という話が太田さんから出されましたが、土木や建築関係における資格取得、専門性そのものなのですが、それに難があるという話を私は伺ったことがあるのです。

今日ある土木科でしょうか建設土木科でしょうか、そこで取れる資格が広範な選択本位になる新たな系統学習の中で、それが充分保証されないということがあるという話を伺ったのです。

前回志学館はどういう資格が取得できるかという一覧表がありました。これは志学館の持っている農業課程や農業科とかそういうこととの比較、あるいは商業関係の比較でありまして、いわば重装備の土木建設、建築が持つものと少し性格が違う訳ですね。ですから、志学館の資料だけで丸子が持っている文字通り現在の現有資産、現有の体制それが継続できるかということについてはやや心配があるという訳です。

もうひとつのことを強調したいのですが、それにしても丸子さんがさまざまな状況の中で何年も検討されて、うちは総合学科で行くということを学校の内部で検討の結果手を上げようとした。これは学校改革のつまり内発的な学校改革という意味ではとても重要だと思うのです。しかしいくつかまだ隘路がある。

たとえば私も高校の教員ですが、私は普通科の教員ですが、他の学校である丸子さんに向かって、「あなたのところこうしたらどうか」ということはなかなかいいにくいことですよ。本当にその専門性等について理解しなければなかなかいいづらい訳で、そういう点では、その当時の丸子実業の教職員のスタッフが学校長以下検討していったということがこのところが大変に大事な点で評価をしたい、一方で評価したいと思います。

そして最後にもう1点は、先ほどそのために塩尻志学館についての質問をしたわけですが、十分な教員定数、加配多くの講師の確保、そうしないと選択講座でも成り立たない。こういう問題も出てくる訳ですから、この点そういういくつかの条件を加味していかなければ、総合学科の問題はなかなか単純にいかない。

ということになろうかと思います。

(飯島委員長)

ありがとうございました。

これも今手立てを、教員数を増やせとかそれから、土木関係の資格が取れるか取れないかいう、そのご心配であります、大きな意味での総合学科、これについては原委員別に、丸子という意味でなくて賛成という形でよろしいでしょうか。

(原 委員)

私はむしろ、丸子実業さんが内発的に検討してきた経過があるからそのことを尊重したいということです。



(飯島委員長)

ありがとうございます。

(原 委員)

それで言っているのです。

(飯島委員長)

はい。

わかりました。

ありがとうございます。

(和泉委員)

私も総合学科をつくることには賛成です。

それはどういうことかという、最初からずっと論議してきたように、これからの時代の多様化の中で、やっぱりそういう消化する部門をつくっていかなければいけない。

そういう意味ではひとつ多様化についての役割、それからやはり進学したい人の場を確保しなければいけない。それから専門性のところも多様化の中のいっしょだと思うのですよね。

それからあと、少子高齢化の中でやはり最終的には効率というものを考えなければいけないのだと思います。やはり最初に出たときに昭和 35 年度の時の人口のイメージをしていった時に、やはりそれはどこかの中で考えていかなければいけない話だと思っています。

ですから先ほど丸子実業の話が出てますが、丸子の人たちがそういうことを考えているということは、いいことだと思います。

私自身がどのように思っているかといいますと、先ほど利便性の中で交通網の話が出るのですが、皆さん佐久の中を見てもらえば交通網というのは、ニーズによって時間帯や本数が減ったり、なくなったりします。ですからそういう意味では坪一単位でものを考えた時に最初から言っている寮というものは、基本的にこれはセーフティネットです。

だからこそ長野はやはり過疎ということと山あいと距離間もある、常に生活の中に密着した問題だと思っています。

それを交通網で拾っていくということはある程度まではカバーできると思いますが、究極的にはどこかで見極めなければいけない問題だと、現実問題として発生すると思います。そういう面で寮を造ったほうがいいというのは、セーフティネットを含めての総合学科を用意しないとそれはいつかこの論議になってしまうと思います。そういう意味でそれがひとつは学校の中のイメージなのですが、あとひとつは地元にとってどういうことがあるかという今までなぜ地方自治体が学校を牛耳ったり開校したかといいますと、購買力の活性化があるのですよ。

若い人がそこにいるといろんな購買力もあるかのもかもしれない、町そのものが活性化する生き生きする。

そういう意味合いで、場所について丸子実業と名前が入っていますが、名前があがった

ら手を挙げてむしろそれをどうやって消化していくかということを地元の方なり、そういう意見が出始めたということについては、個人としては正しいのではないかと思います。それは今利便性だけを問うときにはやはり寮というシステムは長野県の場合には避けて通れないのではないかと思います。そういう長期スパンで見たときには、そういうものをしておいて地元の交流や地域性やコミュニティや若者のつくりとかいうことをやったほうが逆に伸びるのではないかという思いがあるので、総合学科には賛成ですが、何かのセーフティネット、つまり条件はつくってあげないと、この話は「佐久につくる、上田につくる、ここにつくる」ということが付きまとう話だと思います。先ほど丸子実業の中では投資効率の中である。普通科よりもシフトするような、やはり最初我々も考えたとおり、設備のあったところのほうが多様化は早いし投資は少なくて済む。

それはあくまでも国民、県民から見たときの税の効率。そういう意味では正しいのではないかというように思っております。

以上です。

(西村委員)

これでまたいみじくも和泉さんからの話でございますが、我々議論する時に、「こういう問題がある」といったように、否定から入ってきたのです。

そうではなく、「これをやろう、だったら、まさしく丸子に寮を造りましょう」とか、「バスの便が1便しかなかったら2便にしてください」と我々は付帯事項を付けるのです。このような議論を私はすべきだと思っています。

それから前回塩尻志学館の先生から説明していただきましたが、志学館の先生の資料の8ページですが、「1年生のときの進路希望と、それが実際問題進路先がどう変わったか」これが1番のポイントなのです。

これは4年生大学希望者が25.6%だったんですが実際の新3年生のときには37.1%に、増えているのです。

これはどういうことかという志学館は一人ひとりの進路選択にあった授業をしているんです。私はうらやましい限りです。

それからいろいろなキャリアを積む教育をやっているのですよ。

またそこで自分がどうしたら勉強したいのか、どういうほうに行きたいのか、まさしく考えるのです。

中沢委員がおっしゃったとおりだと私は思います。

まさしく教育とはモチベーションを、どうやって持たせるのか。その子どもの能力をどう引っ張るかが我々の仕事ですから、ぜひその辺を加味して議論していきたいと思います。

(飯島委員長)

ありがとうございます。

(小林委員)

私も第2通学区に総合学科設置に賛成です。

前にも2つつくってもいいのではないかと申しあげました。以前の資料に中学2年生が総合学科を希望するのが高倍率でした。事務局の話だとそれは全県的に高いと、それは子どもが要求をしているということだと思います。

それから先ほど学力という話がございましたが、まず興味関心がなくてはならないと思います。詰め込み主義ではだめだという先生方もおられます。

興味関心があってそこから自発的に課題が見えてくる。

課題が見れるということは、その課題を解決するための方法まで見通すから学習があるいは勉強が楽しくなる、と考えたときに、前回の塩尻志学館の先生のお話、各高校の先生方も努力しておられると思うのですが、総合学科という立場上入ってきた子どもがどういう目当てを持って、どの方向に進めばいいのかということ、総合学科の先生方は子どもと真剣に対決せざるを得ない立場に立つと。

これはそういつては申し訳ないですが、普通高校では、そこまでできるのかどうなのか、総合学科高校では卒業するまでに先生が責任を持ってその子と進路を相談をしながら決めていく、決めさせるっていう立場にいます。

これは相当重要になってくるのではないかと、こういう意味であとは他の委員の皆さま方いろいろお話ありまして私も賛成ですが、1番ここが違うのではないかなと思います。

先生方の意識改革ができていると、こういうように判断して今の丸子うんぬんということとは次の段階ですが、私は大賛成です。

(飯島委員長)

ありがとうございます。

(和泉委員)

先ほどの、魅力ある高校ということであったので関連してですが、私がいつも考えているのは、日本のこれからの少子化において労働人口は減っていくのですよ。

それが今いろいろなところで取り出され約60万ずつ減っていくと、でも、それは外国人を受けなければいけないという中で、それからあと今国際的な日本の問題そういうことでですね、私が思っているイメージは寮を造って、そこに留学生あるいはもう高校生もどんどんどんどん出て行きますからね。

そういうものを、職業の中でもいろいろ学ぶ、発展途上国の生徒や東南アジアとあります。

そういうポジションをつくって寮のシステムをはっきり大きくするという、ある面では国際交流を受け入れなければならない時代、どこかでそういうことを手を挙げていって寮を拡充させ、国際交流も受け入れますと、そういうようなイメージがなければいけないと思います。

寮を単なるその地域の寮ではなくてそれはどこか日本の全国の中で、やはり芽を吹いてそれが意味では日本が世界にある程度受け入れられる問題。それからある面では今度は彼らが日本を理解する。それからあとは労働市場になるかもしれない。

いろいろなことが、そういう種まきというか、そういう仕組みというのはですね、どこか教育の中でつくっていったほうが、長期的なことを考えていくときには、やはりそういうことをひとつひとつ積み重ねておいたほうがいいのではないかと考えています。寮のイメージを単なる距離が遠いからというのではなくて、世界の各国からの受け入れられると、いろいろなそういう面のイメージでいっていたので、ちょっと言葉足らずだったので、お話だけしておきます。

(飯島委員長)

ありがとうございます。

そろそろ休憩をとる時間になってまいりました。だいが第2通学区では総合学科を受け入れていこうと。それは、とりあえず最終報告の1校以上、だからこれは付帯決議で2校にするとか、それから、たたき台である丸子にしようというのは別問題として、総合学科を取り入れていこうというような形でだいが意見がまとまってきたように思います。その辺の続きのところ、この休憩のあと、最後多少皆さんからご意見を得てまとめの方向に入っていきたいと思っています。

それでは、10分ほど休憩したいと思います。

【休憩後再開】

(飯島委員長)

休憩前に引き続きまして、委員会を開催させていただきます。休憩前に多少まとめさせていただきましたけれども、最終報告案のそれぞれの4地区、私達では第2通学区に1校以上の総合学科を設けるということに関しては、たたき台である丸子実業ということは別にして、設置に賛成という意見が大勢を占めて来ているように思います。この件につきまして、あと付帯事項は別に付けたいと思います、総合学科を設置するということに関しまして、何かご意見がございましたらお願いします。

(太田委員)

何回も申し上げますが、塩尻志学館高校をモデルにして、実業高校を総合学科・単位制に転換して成功するかどうか、大変疑問があります。

また、丸子実業高校には実業学科の専門性を高めるために、過去多大な投資をしてきているはずですが、例えば、丸子実業高校を多部制・単位制高校に転換した場合は、これらの投資の回収についてはどう考えたらいいのでしょうか。投資効果はどう評価されるのでしょうか。投資がムダになるとはいいいませんが、投資目的については乖離が出てくることになりませんか。

私は総合学科・単位制の導入に反対するものではありません。塩尻志学館高校のように、90%以上の生徒が進学するような学校が、総合学科・単位制に転換するのであれば、私は喜んで賛成いたします。

(飯島委員長)

ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

(宮坂委員)

それではお願いします。前回、塩尻志学館の先生がおいでになりまして、総合学科について説明をお聞きしましたけれども、大変良い点が多いというのは理解できました。そして、子どもは高校卒業後に、何らかの形で進学、専門学校も含めて、進学というのを希望しているのではないかと思います。それでしたら、総合学科という形で進路をみつめるというのは、すごくいいことじゃないかと思います。

塩尻の総合学科になる前は、進学率は決して高くなかったということが、塩尻志学館の資料でわかりますが、60%台だったと思いますけれども、それが転換後高くなったということだと思います。第2通学区も総合学科をつくっていても、例えば候補案の丸子実業についても、そうなっていくることを期待していますので、総合学科は賛成ですが、その反面一つ懸念というか、人気が高まるということによって、入れない生徒が出て来る可能性もある。そのときには、近くない、遠い高校へ行かなくちゃいけないということが出て来るかなと思います。私どものところで言いますと、上田のほうまで行かなくちゃいけないというのが1点です。

そして、もう一つは、センター試験を受験して進学を希望したいという生徒がありました場合、総合学科で可能なのかどうかというのが疑問としてあります。

もう一つは今の丸子の場合、土木科というのは今は不況ということで、比較的人気は高くないと思いますが、これは、親としてそう思うんですが、こういうことがありますので、総合学科ということに転換していくというのは、よろしいんじゃないかなというふうに思えますが、果たして現場の先生方はどんなふうに思われているのか、どのように考えられているのかわからないので、できれば現場の先生にご意見なり、お話をお聞きできる機会があればと思います。

(飯島委員長)

ありがとうございました。

(太田委員)

関連をお願いします。

私もこの件はお願いしていますが、このようなことが可能であるのか、可能でも、先生がこられても事務局が怖くて、本当のことが言えないのでは困りますので、この点は大丈夫ですか。

私は個人的にもお聞きしようと思っていますが、そういう配慮をいただければ是非お願いしたいと思います。

それから、もう一点ですが、宮坂委員が発言の中で、塩尻志学館高校が総合学科・単位制に移行してから進学率が上がったというような受け止め方をされていましたが、一概にそういうことではないと思います。事務局の説明でそのように解釈されたかもしれませんが、前回にも申し上げましたが、いろいろな要因で進学率が向上してきていると判断され

ます。

塩尻市は松本市のベッドタウン化をしまして、今までの農村が住宅地区に変貌し、人口も大きく増加した結果、優秀な学生が塩尻志学館高校に集まるようになってきたということも一つの要因と思われます。

われわれ委員は、事務局の説明を鵜呑みにして、表面的に解釈してしまいますと、判断を間違える場合がありますので、気をつけなくてはならないと思っています。

（飯島委員長）

はい。ありがとうございます。塩尻志学館が総合学科になるとき、丸子実業も手を挙げてきたというこの辺も原委員から意見が出ましたが、重く受け止めなくてはいけないところだろうと思いますし、今、宮阪委員は、地元の保護者代表でもありまして、ややもすると「丸子というところに絞らないで」というお話がやや絞ってきたご意見にはなって来ております。第2通学区、付帯事項は今後付けるとして、2校にするとか場所とか、いろいろなことはまた委員の皆さんからご意見をいただくことにして、総合学科を第2通学区に設置していくということで、一応意見集約をしたいと思いますが、よろしいでしょうか。はい。ありがとうございます。

それでは、そのあとまたご意見をいただく、このあと続けてか…。

（原 委員）

ちょっと一言よろしいですか。

全体の流れは、いくつかの慎重論を持ちながら、そういうことだと思いますけれども、今、二、三の委員さんから発言がありましたように、今、現段階で何年も前のことをそれも重視すべきだという意見を申し上げますが、現段階の丸子さんの意向というのは、ぜひこの席で聞いたほうが、少なくともいいと思うんですね。上小地区の学校ですからね。ぜひそんな機会をとってから、今、委員長さんがまとめた方向に行ったほうがいいのではないかなと思うのですが、いかがでしょうか。

（飯島委員長）

丸子ということは別としましてね。そういうことが事務局に丸子実業の先生をお呼びして、今、丸子実業はどう考えているかということでしょうかね。そういうことも聞くということでしょうか。どうでしょうか。

（荻原委員）

そうしたら南高も望月もみんな呼ばなければいけないと、私は思います。

（飯島委員長）

どうでしょうか。事務局はどういう方法、いかがお考えでしょうか。

(原 委員)

ここははっきりさせたいのですが、「事務局いかがか」ではなくて、委員会がそういう意向があれば、当然そういう方向でまとめて、事務局にはその点でご苦労いただくということじゃないでしょうか。

それから、荻原さんがおっしゃられた「だったら野沢南も望月も」というのは、それもこれからの議論でそうなればぜひそういうことは実現したほうがいいわけですよ。当該校の意見が全然反映されないで、変わっていくなんていうことはあり得ないですから。

(芹澤委員)

前にも言ったと思いますが、まず「望ましい高校はどうあるべきか」というのをまず議論して、今回の場合は、総合学科を採用するか、多部制・単位制を採用するか、これをまず議論して、そのあとに採用するとしたらどのような、「この通学区ではいいか」とか、「総合学科の場合、1校でいいのか2校でいいのか」を議論すべきで、個別のことを議論すると必ずまた元に戻るから、とにかく今委員長さんの言われるように、総合学科はおおむねいいのではないかとということで、大方の賛成が得られればそれはそれで一締めして、あとで総合学科には具体的にどこが適当なのかと。こういう二段階で議論すべきだと私は思いますので、あえて原さんに逆らうようですが、丸子を呼ぶ必要はないというふうに思います。

(飯島委員長)

また、そちらのほうの意見は、実際丸子実業のほうが今、どんな動きになっているか、事務局のほうで把握した上でまた委員長のほうに報告ください。1回総合学科転換に手を挙げたその後、どのような動きになっているのかお願いします。

(芹澤委員)

ちょっと補足させてください。「呼ばなくていい」という意味ではないです。決める場合に、総合学科を採用するかどうかの段階では呼ばなくていいと。だから、具体的に、「どこをどうするか」というときには、「呼ぶか呼ばないか」をこれはまた委員の皆様の判断であると。こういうことです。念のため。

(飯島委員長)

それではまた、事務局のほうで学校の中にかつて総合学科に立候補したときの経緯を含めて、説明できる先生がいるかどうか、一つ調べていただいて、委員長のほうに報告をいただけますでしょうか。その件につきましては、このあとまた考えたいと思います。とりあえず総合学科について、第2通学区では「取り入れていく」という方向で今後、意見を進めていきたいと思っております。

(遠山委員)

そういう方向になってゆくと思いますが、やはり地域を無視したやり方ではなく、地元の市町村長にも総合学科の意味を説明して、首長が納得のうえで進めるべきと考えます。各学校ともに大勢の卒業生もあることだし、その地域を支えながら、地域高校のために

貢献してきた市町村の意見を踏まえて進めてほしいと思います。

（飯島委員長）

ありがとうございます。

それでは、総合学科につきましてはとりあえずそういうことにして、多部制・単位制について、同じような形で議論をしていきたいと思っております。

この第2通学区に多部制・単位制を1校設けて、という最終答申が出て来ております。そして、たたき台として、野沢南が出ておりますが、野沢南ということは別としまして、この多部制・単位制というものを設けていったほうがいいのか、本来の魅力ある学校づくりということも含めまして、必要なことはどうなのか、そんな議論をしていただければと思います。

やや、また前の議論に戻るようなところもあるかもしれませんが、それを含めてこの地域に必要なのか否か。そんなご意見、3校ほど、県外の事例も出てきておりますし、それから事務局のほうでは、計画をして10月末か11月の初旬にそういうような高校を見学したいという話も出てきております。

そのようなことを含めてご意見をいただきたいと思います。

（荻原委員）

まずたたき台が出ているわけですが、特に多部制・単位制に普通高校を転換するということに関して、とても代案が出しづらい状況になっているのではないかと考えています。特に旧5と旧6という考え方が元というかそれを足して第2通学区にしてあるわけですが、その基本的な部分はクラス数の11対6ということで、クラス数の違いで旧5と旧6でなっている。

地域校に関しては、上田方面にはありません。佐久地区の旧6学区には望月2クラス、蓼科3クラス、小海3クラス、軽井沢の英語科を入れて4クラスという4校が現在あるわけです。またそこへ、専門高校ですが、北佐久農業も3クラスということになっておりますが、そういう中で、実際に地域が密着して育てて来た高校のクラス数と平均クラスということで、まず多部制・単位制をどうして旧6通に持ってきたのか、基本的に私は、根拠はないのではないかと考えております。

また、多部制・単位制について聞いてまいりますと、例えばいろいろな学歴という部分がございますが、要するに中学校不登校生の受け入れ、それは現在定時制が負っている部分は多いわけですが、あとは高校中退者1,000人という現実の中で、普通科へ行ったり、専門学科行ったりして、合わないとなるとという生徒の部分の転入、進路変更、あるいは勤労学生、あるいはアルバイト学生の受け入れ、そして、小さいクラスということで、向学心と言いますか基礎的学力の養成という部分はあるわけですが、そういう中では、また通学時間の問題にに戻させていただければ、野沢南高自身は、中込駅から15分かかるわけです。プラス45分とすれば、小諸まで小海線だけで25分かかるわけです。

そういった意味では、そういう部分でたたき台としてどうして南が出てきたのかなというのは、私は、いまだによくわかりません。しなの鉄道沿線ということになれば、利便性その他、広域という部分でも納得できるわけですが、小海線の中込駅から歩いて15分、そ



ういった学校へなぜこのたたき台が出てきたのか、その辺も大変疑問に思っているわけです。

そこはちゃんとほかと比べて説明できることでなければ、たたき台としての意味がないのではないかと思います。ただ単に三交代制の学校でできるのだという、そういうほかの学校から見てうまくいっている都会から見て、これを提案してきたのかなとそうように思います。

一方で、県議会では、「多部制・単位制がなければ、もう一校減らせよ」という方針が示されていると。また基本的なことに戻って申し訳ないですが、その根拠について、もう少し説得力ある、そういった部分での説明をぜひお聞かせ願いたいと思います。地域校の問題を含めて、あるいは職業、専門高校の問題を含めて、その辺のバランスも含めて、県教委のたたき台の考え方を再度お願いできたらと思います。

（原 委員）

関連して、発言をさせていただきます。

今、ご意見にある、特に前段の佐久地方の学校が持つ歴史的特徴ということについては、本当にそうだと思うのです。つまり今、4 学級以下の学校が 6 校ある。私のいる小商も 4 学級ですから。このような方針でいきますと、5 学級以上が 5 校あるのですね。つまり、小規模校のほうが、とにかく多いという体制になっているわけですね。それが、合計して 11 校になる。その数値で割れば 3.7 幾つになるというのは、それは小学生でもそういう計算はできるわけです。

しかし、考えてほしいのは、例えば遠山町長さんがいますけれども、蓼科高校も、学制改革のスタート時は 4 学級規模でしょう。佐藤委員さんがいらっしゃる軽井沢も 4 学級規模ですよ。小海さんもそうだと思います。望月もそうだったですね。

つまり、スタート時から 4 学級規模の学校なんです。それをたくさん抱えているわけですね。ですから、全くその数字だけを使って算出をしても意味がないということです。もともと、それを割れば少ない数値になるわけですね。ここをまずはっきりさせておきたいと思います。

さらに加えてまた困難になっているのは、それらの学校が、少子化の影響を受けて 4 学級のところが 3 学級になり、あるいは 3 のところが 2 学級になる。

これについては、前回に委員長さんが最後のほうで、「その学校は魅力がないからそういうふうになった」というような趣旨の発言をされましたが、私はそれだけではない、もっと構造的なものだと思うのです。学校の魅力だけではありません。その地域が持っている本当になだれ持つような少子化という問題、経済・社会的な背景、その他、要因はあるわけです。したがって、丁寧に見ていかないと、「魅力うんぬん」一言で片付けられる問題ではないというふうに思います。

それから、これは、多部制を考えていく上でも、その他のことにも共通するのですが、多部制にかかわって、さらに言えば、この 9 月の県議会のご答弁で、教育委員会は、新たにつくられる多部制・単位制については、私の理解が間違っていたら直していただきたいのですが、「午前部 1 学級、午後部 1 学級、夜間部 1 学級」というふうにお答えされていますね。

そうすると、これはまず名前と結び付けてはいけない、また、この小諸市長さんに怒られそうだけれども、6 学級の学校をつぶして、夜間は現在ありますからね。「これはいったい何ぞや」ということになるわけですね。つまり、そのところが、荻原委員さんの言葉に戻れば、納得いく説明がない。こういうことがこの問題状況だと思います。

まだ関連で発言したいこともあります、1 人の発言が長くないほうがいいですので。

（飯島委員長）

前回の私の意見について、今、原委員にコメントをしていただきましたが、「魅力ある学校でないから、人数が少なくなる」というような、私は発言した覚えはございません。要は、高等学校標準法に基づいて…。

（原 委員）

それは、スケールメリットのことはおっしゃられました。そのあとに…。

（飯島委員長）

ですから、「小さな学校になると開設科目も少ないし、部活の数も少なくなるから、どうしても子どもたちにとっては、魅力が少なくなる」というような発言をしたと思います。もし間違っていたら、また議事録のほうで見て、対応したいと思っております。

また、荻原委員から、少し前に戻った議論になりますが、この3 点に対して「魅力ある学校づくりのために」必要なかどうか。つい野沢南高となってしまいますと、いろいろ問題が出てまいります、少しご意見いただいたあと、もう一度昔を思い出す意味で、事務局は、どういう根拠で南高を推したのかともう一回聞いてみたいと、説明を最後につけたいと思います。

（太田委員）

多部制・単位制高校は総合学科・単位制高校よりお客様のニーズが高いのではないかと思います。ただし、これには絶対条件があります。この学校はいろいろな人を受け入れていくことになりますので、利便性が絶対条件です。

事務局の案では、利便性は二の次、三の次に考えられており、おっしゃることとやることが違うのではないかと思います。

それから、今回の改革案で軽減される費用が 23 億円と説明がされましたが、私は当初、改革にまつわる財務的な数字がだされていけませんので、県はコスト意識がないのかと思い、教育費の削減も財政改善の範疇でおこなうべきであると発言した記憶があります。しかし、この数字が出されてきましたので、前言を撤回いたします。かつて芹沢委員が、教育は米百票の精神であたるべきである、といわれていますが、私も同感です。これは教育改革のための再投資に振り向けていくべきです。

民間の例で申し上げますと、これはこのまま参考にはなりません、会社は限りなく継続発展していかななくてはならないという、社会的な責任、使命をもっておりますので、成長分野への投資は欠かすことはできません。製品にも導入、成長、成熟、衰退というライフサイクルがありますが、成熟期にある製品で儲けさせていただいた資金を、次の成長期

にある製品に重点配分して、ゴーイングコンサーンを可能にしていく、というようなことは経営の基本原則であります。

教育事業に関しても、次の時代、新たなニーズに応えうる、教育改革のために再投資をおこなっていくべきではないかと思います。

利便性をもって、多部制・単位制高校を成功させるために、既存の校舎を再活用するというような、その場しのぎの対応をするのではなく、新たな学校づくりに投資をお願いしたいと思います。

（飯島委員長）

ありがとうございます。それでは、事務局のほうで、繰り返しになりますが、野沢南になぜたたき台を持っていった、この論拠をもう一度言ってほしいという荻原委員の要望ですから、お願いできますか。繰り返すようになりますが、お願いします。

（柳澤教育主幹）

はい。前に候補案の解説と言いますか、「詳細について」ということで、資料をお配りしてご説明申し上げましたが、基本的には多部制・単位制高校について、平成15年6月に長野県にふさわしい多部制・単位制高校の検討をした委員会から報告を受けまして、それをこの高校改革プラン検討委員会が引き継いだという形になっております。ご承知のように各通学区に1校ずつ配置ということで、お願いをさせていただいているわけですが、その検討依頼事項でお願いしたときに、新しく土地を設けて新しい建物を作ることではなく、既設の学校を転換をして多部制・単位制の独立校にしていきたいと、そういう考え方でお願いをしたという経緯がございます。

これまでの、先ほどまでの華陽フロンティアの例もございましたが、太田委員さんからもいろいろニーズの高い学校だというお話がございましたけれども、松本筑摩に2部制と言いますか、昼間部と夜間部の単位制をつくって、応募もかなりあるというような実績もあったり、地域からも「早くつくってほしい」というような声も寄せられているところもあるわけでございます。

この地域は、やはり第1通学区との関連ということも一つはございます。この配置の問題を考えたときに、第1通学区が坂城高校でということで、候補案としてお示したわけですが、その関連もございまして、旧佐久市内、南佐久一帯を含めて、旧佐久市内4校あるわけですが、そのいずれかを転換というようなこと。そういう中で利便性、あるいは現在の定時制が設置されているというようなことも含めて、この野沢南高校を転換して、新たな生涯学習も含めた佐久地域の拠点の学校としていきたいと、こういう形でご提案を申し上げたということでございます。

（飯島委員長）

荻原委員いかがでしょう。

(荻原委員)

本当に「たたかれ台」にもならない「たたき台」と私は思うのですよ。

だから、その必要性、受け入れ、スケジュールに入っている、それはしょうがないよね。スケジュールに入っているからやらなきゃならないという部分はわかりますが、私どもも不勉強ながらいろいろなことを、学校要覧見たりしているわけです。そういう質問に対してまた同じ答えが帰ってくるのでは、ちょっとおかしいんじゃないかという、私はそんなに感じています。

いろいろな静岡、それから先ほどの資料を見ても、もう一つ質問を変えれば、県が持っているイメージ、たぶん先ほど原さんが言ったように、3部制でやるのなら、まず早くから普通では8時50分、終わりが9時ですか。そういう中で、そこに来る人たちも実際には先生に相談したいだろうし、サークル活動もやりたいだろうし、いろいろな要求があると思うんですよね。そういうことで、県のイメージしている学校がこの3つの中で私はどれだかさっぱりわかりません。

私は、そういうあやふやな学校をつくるなら、例えば松本筑摩という提案が出ましたが、その成果が上がって、塩尻でも、志学館になって10年ぐらいかかっているわけですよね。そういうふうには長いスパンで、もう少し多部制・単位制という部分は、考えたほうがいいのではないかと思います。それだったら、定時制あるいは専門高校を含めて考えないと、特に佐久では地域校の問題が、一番私は問題となりますので、そういう部分を含めて納得するイメージをちゃんとと言わないと、ますます不信感が高まっていくんじゃないかと思います。

例えば野沢南高で、3クラスですか。残りの生徒はどこに行くんでしょうか。意見としてお願いします。

(中沢委員)

多部制・単位制については、私は前から申し上げていることと一部重なってしまいますが、「いつでも誰でもが、自分のペースでいろいろな学習のスタイルで学べる」、そういう考えは確かに魅力があって、それなりに価値もあるということはわかります。

ところが、ほかのいろいろな県の状態、情報を見たときに、一つには例えば充足率に満たない高校、それが多部制・単位制に変換するというような例もあるし、それから、かなり大きな都市部、人口例えば静岡のような70万とか、そういう大きな都市部でそのニーズに応えていくということで、かなりの受験者数が増えてきたということもあるでしょう。

それから、もう一つは、交通の便が良くて、そこへ多くの生徒が通えるというようなことで、ある程度、ニーズが高まってきているというようなこともあると思うのです。そういったことを考えたときに、この二通学区の中で、果たしてそれが対応できるかということに非常に私は前から言っている通り、疑問に思っています。

やはり、もしさっき太田委員さんがおっしゃったように、本当に新規に投資して、たとえ少人数でもやっていくよと。例えば120名を想定しているんですが、そんな人数がなくてもいいよと。やはり社会性から見て絶対必要なのだと。そういう強い信念があれば本当に一番効率の、利便性のいいところへ作っても私はいいかなという気がします。

もっと言うならば、例えば具体的に上がっている野沢南高校は、充足率100%を超えて

いるのですね。そういう普通科の学校を変換することには非常に疑問に思います。

そんなことで、単位制・多部制については、本当にもっともっと意見を戦わせながら、いくつか出し合いながら本当に考えていくといいかなということを思います。

（飯島委員長）

ありがとうございます。ほかにご意見はありましたらお願いします。

（市川委員）

お願いします。今のお話の経過をつぶさにお聞きしまして、多部制・単位制のシステム、あるいはその形態そのものについては、皆さんご賛成ではないかなという判断に思い達しました。私もそういうふうにいる一人です。多部制・単位制がどういう形態であれ、この中にできてくる意味は大きいというか、東信地区に一つできる意味は大きいと思っています。

総合学科につきましては、資産がある学校、職業科の資産がある学校が普通科と合わさって総合的な学習を進めていく。しかし、資産のないところは、多部制・単位制という形態を取る。特色を持っていく。これはいいと思います。

というのは、不本意ですが、輪切りの進路指導とされている中学側、その中で一つシステムの個を一人一人生涯学習センターの役割も含めた、そういった学習施設ができることは、生徒の進路選択、中学校の生徒の進路の選択の意識としても、大きな魅力になるものだと思います。その例として、各県では、応募がどんどん増えてくる。例えば塩尻志学館も、塩尻高校の頃とはずいぶん違った要素を呈した学校になってしまって、新規高校と言いつつも、特色を出して、また進学校になるような学校にも転換してきているという。

また別な言い方をしますと資産のない高校に戻りまして、多部制・単位制の言葉を一つに考えますと、大きく資産のない学校が質的に大きく変わって、魅力を訴えるものだというふうに思っております。

たくさん、教育委員会から提出された中で、「e learning」もあればネットワーク化や、連携もあれば、中高一貫教育もある。たくさんの高校の魅力のシステムを精査なされた中で、私達はたった二つだけの選択です。一つは、総合学科による単位制の高校、もう一つは、多部制・単位制の高校。これは、資産のない学校というふうになると思います。

最も安価な方法として、この中で、現高校の転換を図っていこうというようなことは最も安価な方法で、コスト的に言いますと非常にやりやすい方法で、多部制・単位制の高校を実現しようというものが出ると思います。

しかしながら、先ほど何人かの委員さんが発言されたように、利便性やそういうような生涯学習センターのように、こういうふうになるものであるならば、もっと利便性の高いところというようなのが私はあったと思います。そうしますと、私も賛成なのですが、ここでまた一つ問題が考えられるのは、生涯学習センターですから、選抜ということを考えますと、これは公的な教育施設ですので、多くの応募者を受け入れるということになってくると思います。

魅力があり、中学生、多様な先生方がいらっちゃって、その中で生徒が、多様な進路を選択できるようなこともうたっていきまると、これまでの 高校、A・B・C高校とい

うような、上から A・B・C・D と分けた中で、テストの成績がどうのこうのということで割り当てられた中によって生活してきた子ども達にとっては、大きな魅力ですから、しかも駅前にできるということになると、旧第 6 通学区の奥からも、無理して通って来るのではないかなと思います。

そうしますと、今後少子高齢化になったときに、新たに一つ現状の施設を転換するのではなくて、新たに一つに多部制・単位制の高校ができたとなると、これが、要するに牽引の長でありますから、そうしますと、しかも魅力があるとなると、数多くの生徒が集まるのではないかなという期待はありますが、その点についても今後、そうしますと、少子高齢化にあって、ずいぶんこれから現状の高校はのんびりしていられない状況になると思います。

ますます生徒数が少なくなる学校もずいぶん出てくるかもしれないから、魅力ある学校が一つ上田に出現するわけですからね。そうなったときに少子高齢化という難問と、今回初めてやっと少子高齢化になって、高校の質的な転換が図られ、そして、効率化が図られて来ている中で、また問題を残すようなことになりはしないかなという懸念を持ちますが、私は、駅前にもしてできるとするならば、賛成です。

公立の高校につきましては、公立選抜制度については、公立ですので、私立が多様な入試に合わせて、多様に生徒を推薦入試の多様な取り扱いで、私立が生徒を自由に集めた中で、転換を図ってきた。しかし、公立高校は、入試選抜の自由度が与えられておりません。入試は、きちんと決められて一斉に行われる。公立によってやっと先生方が中学を訪問して説明して歩くという状況でした。

そういう中で、私立が非常に私学重視を勝ち取った、評判のいい状況を勝ち取ったりしていくわけですが、公立の教育施設の使命としては、また別のような観点があるかなと思います。それはやはり、いくつかの高校、教育の転換で、これからどういう生徒を育てて巣立ちをさせるかという点において、大事なことだと思います。

付け加えますと、先ほどありましたように、資産は先生方だというふうに思います。ここに教育予算としてたくさんいただいている情報、情報を仕入れるためのコンピュータをたくさん入れていただいているとか、そういうことはあるかもしれませんが、ほかのような機械科棟と違いまして、先生方がたくさん集まっていっちゃって、50 人、60 人いっちゃれば、先生方の指導も 50、60 のバラエティに富んだものになります。男性もいっちゃり、女性もいっちゃり、老若男女たくさんの先生方の中で子ども達も育ち、それが強いて言えば、社会です。

そういった中で、今まで細かくわかれていた定時制が統合され、多部制・単位制として先生方の多くの個性によって、引き出されて社会に巣立ってくるというような、あるいは子ども達のすり合わせ、教師と生徒の間のすり合わせだけではありません。やはり、ストレス社会に巣立つには生徒同士のすり合わせも必要です。教室の中に何人が生徒がいて、やはりクラブ活動の話をし、そして勉強の話をし、さらに話をし、すり合わせをしながら、巣立っていく。そういう姿が見られるような気がいたします。多部制・単位制によって集約し、多くの先生方の中で、自分は将来見て行く生徒を見ております。期待したいと思います。

私が今イメージしているのは、全て私がこれまで卒業させてきた生徒、今後、卒業させ

てきた生徒を思い浮かべながら私は話をしております。こういった生徒がどの学校に、どういうところへ就職したか、それを思い浮かべながら話をしております。そういったことを考えて、ぜひ魅力ある高校教育の質的変換を図る一つの起爆剤と言いますか、そういう多部制・単位制を期待しております。

（飯島委員長）

ありがとうございます。多部制・単位制についての設置は賛成だという意味で、どこへ造るかということは別問題として、賛成の意見を先生の経験からお話いただきました。

（佐藤副委員長）

私は、多部制・単位制も先ほどの総合学科も否定的な意見を申し上げているわけですが、この多部制・単位制というのは、私は先ほどどなたか提案されたように、全く独立したところへ、例えば具体的に言えば上田とか、そういうようなところに全く新たに独立した形で作るということになれば、私は賛成です。

しかし、先ほど荻原さんのご意見ですかね。この単位制高校をつくるという条件として、既設の高校の転換であるという、こういう条件が我々についているわけですね。そういう中でものを考えていくと、非常に難しいと考えるわけです。具体的に言えば、高校名を挙げてはいけませんが、実際には野沢南が候補に挙がっているわけですが、その高校を単位制・多部制に換えるということに関しては、非常に疑問を感じておりまして、否定的でございます。

なぜかと言いますと、一つは、利便性の問題です。これが非常に難しいんじゃないかなということが一つ。それからもう一つは、野沢南高というのは中堅の進学校ですので、この学校に値するだけの単位制・多部制高校がそこにできるのかという、地理的な条件から来ているのですね。そういうことで、私は、場所はまた新たに考えなくてはいけないのではないかなと、今は考えております。

それともう一つは、やはり全く新しい発想の下でつくるということになれば、これはまた別ですが、少なくとも多部制・単位制というのは、午前・午後・夜間とこのような中で進められていく中で、いったいその中で学ぶ生徒の部活や、学校生活ですね。そういうものが本当に高校生として、高校を卒業したということに対して、果たしてうまくやっていけるのかどうか。全く別々の時間に来て、別々のコースで学ぶというような中で、そこで学んだということになるのかと、こういう心配がございます。

上田の例えば全く新しく駅前につくるという話になれば、最初からそういう学校である。むしろ、生涯教育を大きな柱としてやっていく。そういう中であれば、当然それはそれで理解できるわけですがけれども、既設の高校の中で、なおかつ中堅どころの学校を転換してまで果たして何のメリットがあるか、そんなことを素朴な疑問でございしますが、感じております。

(原 委員)

同じ趣旨の発言を続けさせていただきます。

前々から申し上げていることで、かなり従来の発言とだぶることもあることを予めお断りしたいと思うんですが。第一は、今度の県のたたき台の中に、総合学科と同じですが、多部制・単位制、既設高校の転換という今のご指摘ですね。それから、もう一つは、その際に定時制の適正配置、定時制の統廃合という問題が実はセットになっているということなですね。

これは前回特に言いましたから、定時制に通う生徒のセーフティネットワークとして、現在の定時制を、小規模なアットホームなそういう感じを残していただきたいということは、すごく繰り返し述べてきたわけであります。だから、これも切り離して考えなければ本当はいけないということですね。だから、多部制・単位制だけの議論ではなくて、全部方針がそれが制度になっていますから、切り離れた議論が一つは必要になるかということを一に申し上げます。

それから、多部制・単位制の制度そのものが持つ事柄について触れたいのですが、いろいろ総合して「こういうメリットもある、ああいうこともある」というふうにおっしゃることは、確かにあるんでしょうが、議論がリアリティに欠けるんですね。つまり、もっと現実的に考えましょう。「午前部があって、午後部があって、夜間部があって、そして相互が三修制を取り入れて、3年で卒業できるようにですよ。午前部と午後部が、相互乗り入れをする。午後部と夜間部も相互乗り入れをする」と。こういう形になりますよね。

私ども教員をやっていると、本能的に感じるのですが、学校はやはりいろいろ言っても、ある意味での一定限度の管理が必要なんです。午前部の生徒が午後部がどこまでとっていて、この子はどこまで学校に拘束されているのか。もちろん自主的に選んだにせよ、ですよ。そういう点では、生徒の把握において非常に困難をきたすということを思うのです。

それから、二つめは、いくつかの県外の学校の例が出されていますが、そこで案外落ちているのは、生徒の自主的な活動、生徒会であるとかクラブ活動なんですね。

では、運動部のクラブを選んだ諸君は、午前部に在籍していたとしますね。そのうちの半分は、午後部まで履修したとしますね。どこの時間帯でクラブをやるんでしょうか。体育館が三つも四つも「午前部用生徒の専用体育館、午後部用専用体育館」とあれば別でしょうが、そういうことから言っても、一番高校生にとって教室の学び以外にも必要とされる自主的な質的な活動が保障されにくくなる。これは、リアリズムを持った見方ですよ。これから、単位制・多部制がどういうふうな運営を工夫をしても、免れない特徴だと思うんですね。この点は、ぜひご検討をしていただきたいところであります。

(飯島委員長)

ありがとうございます。

多部制・単位制の議論が進んでおります。ややもすると、私達推進委員会の設置要綱の中で所掌事項の中で「魅力ある学校づくり」に関する事項、そして、最終報告書にある「総数の決定基準に基づく県立高等学校の再編整備に関する事項」これも私達の所掌事項です。

ですから、今、委員さん方で出ましたように、既設校を転換するということも含めて、またもう一つ少子化が進んでいる、前回の資料が出てまいりました。少子化がどんどん進



んでいる中で、現状の旧6通だけに限ってあえて発言させていただきますと、それぞれの学校が、それぞれの今の規模が維持できない生徒数になるという、これも頭に置きながら一つ考えをいただきたいと思います。

現状のままの生徒数があればある程度は問題はないかなと思いますが、これが減ってくるのですね。これについてどうお考えになるか。どこか一つ二つ、なくなってきてしまう可能性もある。実際に学校を開いていても、子ども達が集まらない学校が出てきたときにどうだろう。そんなイメージもお考えになりながら。

それでは多部制・単位制を魅力ある学校づくりの中で採用しないとすれば、ほかにどのような代替案があるのか。あるいは、必要ないのか。その辺のところのご意見を合わせていただければ。ただ、「多部制・単位制がいらない」じゃあ、何私達は魅力ある学校づくりとして、新たに設けていきたいのは何か。その辺のところをお願いします。

（滝澤委員）

いろいろと今回までお話を聞いてきまして、多部制・単位制というところでかなり反対の意見が多いこと。それから、指定された学校からもすいぶんとご意見をいただいておりますし、外部からも多部制・単位制についてのお手紙をたくさんいただいております。

多部制・単位制という高校の制度というのを、かなりマイナスイメージで皆さんお考えになるというのではないかなと私自身思っています。先ほどの「利便性のいいところで」というお話もありましたが、そういう意味では、一番利便性のいい一番大きな学校ですと、「多部制・単位制に換えましょう」という意見もこれはこれとしてあるのではないかなと私自身は思っております。

逆に多部制・単位制というのが、特色を持ったクラスが例えば10クラスぐらいありまして、それぞれの目的に応じて活動しているという、そういうことも多部制・単位制の選択肢の中にはあるのではないかなという、そんな意見を持っております。

（飯島委員長）

ありがとうございます。マイナスイメージだけで多部制・単位制を考えるのではなくて、プラス思考で多部制・単位制を考えながら、より魅力ある学校づくりに私達はどういうふうに意見を戦わせ、報告書に載せていくという、前向きな意見でありました。

（西村委員）

具体的に県教委が示している野沢南がいいのか、それとも、駅前の上田駅ビルがいいのか、これは私自身もいくつか考えがございしますが、それは、あとの議論ということで、私は、多部制・単位制につきましては、導入すべきと思います。

その理由は、ずっとこの3回か4回が議論している中で、太田さんと佐藤さんとは、私のイメージが違いますが、つまりモチベーションが大切なんです。

私は、生徒、子ども達に何が一番必要かいうと、まさしく今日は小林委員がおっしゃったように、どうして勉強するのか、何に興味を持つのか、「じゃあ私はこういう勉強をしたい」それが一番大事なことだと思っています。今、本当に情報過多であります。いろいろな情報が入ってきますので、我々よりよっぽど知っているのです。その中で彼らは、選択す

る力がないんです。「ない」と言ったら彼らに悪いですが。そこではこういった能力をみつけてあげるかということ、やはり動機付けなんです。モチベーション。それが一つは総合学科であり、私は多部制・単位制と思っています。

というのは、午前部の授業をとって、「私は英語のできる学校に行きたい。そして就職をしたい」というので、午後のところでそういった英語力をアップする授業をとるんです。「私は音楽系に行きたい」と午前中行って、音楽科のいくつか授業をとる。そうすると、自分で選択する科目を自分で決めていくということは、逆に言うと普通科の普通高校に行くよりも自分で進んで勉強できるんですよ。

私は、先ほどプラスイメージとしましても、私は面白い学校展開が、多部制・単位制はできると思っています。ですから、ぜひモチベーションの意味で、私は導入すべきです。ただし、これをどこにするのかというのはまた別な議論になると思います。

（飯島委員長）

ありがとうございます。

（小林委員）

前回も申しましたように、私達はこの多部制・単位制というのは、未経験な分野でございます。ということは、外見的にみんな考えてしまっているの、本当にいいのかどうかというのは、私自身、今まで体験も経験もしていないので、結論は出づらいつつ。私自身も今までのことを引き継いで考えてみると、マイナスイメージです。

ということは、この「多部制・単位制＝今の定時制の子ども達を一つのところへ集める」というイメージが強くなるわけですが、私は、違うものであると思います。今の定時制をセットにしてと先ほど、原委員からのご指摘がありましたが、定時制の子どもは大事にしないでいいし、これから何年後に新たな考えで進学してくる子ども達がどう考えるか、それは今後に待ちたいと思います。

新しく違ういいネーミングをして、「名前を聞いただけでもワクワクする」とか、「そういう高校があればいいな」というような、そういう名前にして、そうすると、中身もこうということだということが私達、あるいは子ども達に定着してくれば、「その高校に行きたいな」そうじゃないと、今現実にマイナスイメージで考えている高校の皆さん、あるいは他のない高校でも、私達にも導入して欲しいなと、いう議論が欲しいなと思います。

ただ今まで「遠くていけないとか、こういうことだ」というマイナスイメージだということで、子ども達を通えるようになるだろうか。前回、小諸高校では、音楽科へ白馬から通っている子どもがいるという話もしました。本当に魅力があっていいとなれば、遠くまで行くのではないかなと思います。

この辺でも東京まで塾に通っている子もいますが、もっともっとどういうふうになればいいかと、プラス思考で考え、その結果子どもはどこへ行くかどうするか、それでもだめだとなれば仕方ないけれども、今のところ話が前に行くんじゃなくて、マイナス、マイナスへ行っているようで、議論が進まないし、自分がこういう発言をしなければ、いけないんじゃないかなと思います。

それはそれとして、本当に多部制・単位制というのはいいのかどうかとか、最初の説明

のところで、文教委員会のところにもありました。26 ページに、議員さん、県議さんが視察に行ったところ、視察したところ、「こういうところが大変良かった。見に行ったら良かった」というような話も議員さんのほうからお聞きしましたが、私達も実際に事務局のほうでご苦労いただくようですが、「実際に見て、本当に自分のハートで感じて、いいのか、それじゃ困る、もっとこういうことで」と前回も申し上げたのは、普通関係じゃなくて、先ほど総合学科的内容を取り入れたり、「e learning」なども先ほども触れましたが、もっと幅広く考える。こんなことで議論を進めなければ進んでいけないのではないかなと思います。それを議論し、どうするかはその次になると思います。以上です。

（飯島委員長）

はい。ありがとうございます。「魅力ある学校づくり」その問題提起を再度いただきました。確かに多部制・単位制、それがつい新しいものですから、悪いほうにばかり考えてしまいますが、プラス思考の意見をどんどん述べていってほしいとそういうご意見であります。

（市川委員）

多部制・単位制のイメージは、私は割とイメージするのは簡単ではないかなと思っております。というのは、今の大学・短大が非常に多部制・単位制高校に近くなってきているわけです。ご存知のように、大学は法学部とか、国文など、今の大方の枠組みはありますけれども、早く言うと単位制の学校なわけです。

しかしながら、私も大学を卒業してきましたが、大学の中ではキャリア教育、その他を一切してもらいませんでした。「この単位をこうとっていけばこうなるか」ということは、自分で全く考えてきたわけです。それで、将来は自分で情報を集めてどのようにしてどのようにして就職して、どういう会社に来るなんていうことに関しては、一切学校で、一応就職指導部がありましたが、就職の掲示をしてもらっているだけでした。その掲示板を見て、私は単位をとってあるいは教職課程をとって、私は文学部でしたが、哲学科の内容についてこうだということを取りまして、それで出てきました。それは、自分に任されていたわけです。

しかしながら、今の大学はそれではいけないということで、就職指導部、進路指導部が大変に手を入れて、一人一人面接指導までしていただけます。あるいは、私の息子の大学では、企業を呼んで説明会を開いて、一人一人やってくれているということでした。保護者も大変熱心で、私なども驚くぐらいに大学教育では熱が入っておりまして、就職をどのようにするかというような、キャリア教育をやっております。大学の先生にお聞きしますと、今の学生は大変熱心で、授業には出ると。毎日毎日授業によく出ると。しかし、5 人に 1 人は大学を出口ですくんでしまうと。

あるいは、大学に行きながら専門学校にも行くと。あるいは就職活動で指導していく中でも、上田でハローワークの所長さんの話ですとか、大学の先生方のお話を聞いても、「私達の頃とはずいぶん違った指導をされているな」というふうに思います。

しかし、これが、多部制・単位制の高校のあり方ではないかなと思います。私は、こういう生徒一人一人に目を向けて、例えばフロンティア高校の例でもあります但しレポートを

提出するんだ、テストをするんだ、単位認定をするんだ、単位取得をするんだ、スクリーニングがあるんだと、そういう仲間づくりの場である。マイペースで勉強して、自学自習でやると。部活動もということになっております。これが通信制課程であります。通信制、定時制課程でも同じように部活動、特別活動とさらに行われている写真も含めて、出ております。

これは、一つの高校に2種類集めて先ほどの適正規模、効率化、あるいは民間のお話の中での合併ということになって、あまり聞こえはあるかなと思いますけれども、私は、生徒一人一人の将来を案じ、先生方一人一人が手を入れて指導していただいている学校の成果が、多部制・単位制というシステムによって作られてきているのではないかと思います。

これを今までのような定食方式と違いまして、これだけ食べてやっていけば必ずだということ。しかし、定食を食べさせているはずなのですけれども、高校3年間でほとんど実は野菜を食べないで卒業しちゃっているわけです。あるいは、たんぱく質を摂らないで、山に登っちゃうようなそういう状況でも卒業しちゃっているわけなんです。

それを、ちゃんとアラカルト、「これとこれとこれを食べる。こうなるんだよ」というような、処方せんの下にやっていただけるということだと思います。

そのようなことで、期待をしております。以上です。

(中沢委員)

いろいろ議論がされている中で、私も含めて多くの方が具体的な姿を知らないんですね。当初、最初に県教委のほうから話もあったように、視察も可能だということを聞いていますので、実際にそういう学校へ私どもも行って、そして、話を聞き、その中で課題は何なのかということも、直接聞くことによってもっと具体的になってくるんじゃないかということをお思います。そんなことで視察ができれば私はそうさせていただきたいと思っています。

(飯島委員長)

ありがとうございます。時間になってしまいました。事務局のほうからも説明がございましたように、長野県にふさわしい多部制・単位制高校についてということで、平成14年5月から6回に渡って委員会が開かれて、その報告書が15年の6月に出しております。

それを受けて、検討委員会で最終報告ができております。またそれを受けて私達この推進委員会をしているわけでありまして。その辺のところももう一度皆さん頭におきながら、また、プラスとして実際にこれから先は「少子化が来るんだ。その中で私達がどういう魅力ある学校づくりを子ども達に提示できるか」ということになるんだろうと思います。

この後、事務局のほうから次回の委員会の日程と、併せて、今中沢委員からお話がありましたように、推進委員会の皆さんも現場を見にいったらどうかという話を受けて、10月末か11月の初旬にそれ相応の学校の見学が予定されるやに聞いております。そんな意見を含めながら次回の委員会をお願いしていきたいと思っています。それでは事務局のほうで、次回の日程についてお願いします。

(植松主任教育支援主事)

お願いいたします。次回の予定につきましては、10月28日金曜日を考えております。会場につきましては、現在調整中でございますので、また決まり次第お知らせをしたいと存じます。また、学校の視察につきましてもまた計画ができ次第また委員の皆様のほうへ連絡を差し上げたいと存じます。

それから、もう1点でございますが、11月、12月のスケジュールをお伺いする用紙を机の上に置いてございますので、またご記入いただきまして、14日辺りまでにまた事務局のほうへFAXでいただければというふうに存じますので、よろしくお願いいたします。以上です。

(飯島委員長)

ありがとうございました。次回は10月28日に決定をしているということでご理解をいただきまして、本日の委員会を終わりたいと思います。ありがとうございました。